



HAOK

16

エピローグ

KAI SHIGIHARA



16 エピローグ

携帯の振動音で目を覚ましたジュリアスは、いつものようにベッドサイドのチェストの上を手で探った。バイブはメール受信を告げたもので、すぐに音は止む。ジュリアスは手に触れた携帯から届いたメールの内容を読みとる。ドミニクからで、これからそちらに行ってもいいかという確認だった。わざわざ確認してくるのは、レスリーの存在に気を使ってくれているからだろう。了解の返信をしておいた。

ジュリアスの隣、レスリーはぐっすりとよく眠っている。疲れているのだろう、横でジュリアスのごそごそしてもびくりとしなかった。

なにしろ、誘拐され救出されるという激動の一日は、昨日のことだ。まだ疲労が残っていただろう。それなのに、ジュリアスはかなりしつこくレスリーを抱いてしまった。

レスリーが欲しくてたまらなかったのも、一度抱いたぐらいでは熱が下がらなかったのもある。だが、抱くことで、レスリーの中に残っていた、ケビンにつけられた傷に気がついたからでもある。ジュリアスに抱かれながら、レスリーは何度もケビンとの間にあったことを思い出した。ジュリアスと比較していたということではないのはわかっている。ちょっとしたことで、ケビンにされた記憶が刺激され、フラッシュバックのように思い出されるのだ。

そのほとんどを、ジュリアスも見たとと思う。すでにケビンが拘留されているのが残念に思えるほど、ひどい記憶も多数あった。

そして、ジュリアスはレスリーのケビンの記憶を全部自分との行為で上書きしたくて、レスリーに思い出す余裕なんてないぐらい快感にあえがせたくて、要するにレスリーを自分でいっぱいにしたくて、かなりしつこく抱いてしまったのだ。

ジュリアスは眠るレスリーの目元にキスをして、そっとベッドから起き上がる。

もう、夜の八時だった。一日ベッドの中ですごし、昼食を抜いたことになる。だが、この二年で一番、すがすがしい目覚めだった。

夕食の準備が出来た頃、ドミニクがやってきた。

「ようやく起きたな。心配したんだぞ」

両腕を伸ばしてハグするドミニクに逆らわず、ジュリアスは兄の背中に腕をまわした。

「ありがとう。ドニのおかげだよ」

「お前が頑張ったんだろ。よかったな」

「うん」

ドミニクも、昨日から駆け回って、今日も関係各所との調整に忙しかったのだろう。明らかに、寝不足な顔をゴシゴシと手で擦り、きちんと着ていた軍服のボタンを外した。そして、テーブルの食事に目を輝かす。

「母さんが来たんだろ。冷蔵庫が充実してた。たくさん作ったからどうぞ」

「やった。腹ペコだよ。レスリーは？」

「上で寝てる。もうすぐ起きると思うけど」

手と、ついでに顔も洗ってきたドミニクに、ワインを渡す。目と目を合わせて、軽くグラスをあてる。ちんと、涼やかな音がした。

「兄貴として弟の健闘をまず褒めたたえたいとこだけど、レスリーには聞かせたくない話が先だな」

「ケビン、どうなるって？」

「それが、色々ややこしいことになってる」

二人は椅子に座ると、ローストビーフをせっせと口の中に運びながら、ワインを飲みつつ、真剣な会話を続ける。

「ジュリの危惧は大当たり。あの強引なシステム抹殺で、研究所内で死者が出た。レーザーを使った実験中にシステムダウンしたとかで、そのレーザーが制御不能になってってことらしい。あと、突然閉まった非常扉に指挟まれて切断の事故。密閉された実験室に閉じ込められて、酸欠で意識不明で治療中の事故。当然、レイノックス側も、ケビンの身柄を引き渡してほしいということになる。向こうは殺人、こっちは誘拐と殺人未遂。さてどうなるか」

「でも、それだけ罪状が並べば、死刑とか無期とかになりそうかな」

「レイノックスの法律には詳しくないが、奴はそういう事故が起こることをわかっていて、システムをダウンさせたわけだから、それもあり得るだろうな」

「親父はなんだって？」

「ノーコメント。まあ多分、すごく上の方で色々と政治的判断が働くだろうってことな」

それならば、レスリーのためにならない結論にはならないだろう。

被害者であるレスリーの父は伯爵だし、ジュリアスの父も動いてくれる。となれば、ネイサン様も動いてくれるだろうし、女王陛下はとても聡明な方だ。レスリーがこの先も怯えて生活しなくてもいいように、ちゃんと考えて下さるだろう。

「一大隊長に呼び出し食らったぞ」

「え」

ジュリアスは以前、大隊直属だったので、勿論、大隊長はよく知っている。

親子ほどに年の離れた人で、猛者というのがぴったりくる、豪快な人だ。若いドミニクとジュリアスのことを、子供扱いする人だが、ちゃんと能力も認めてくれている。

「復帰するつもりないのかって」

「それは……」

今回のことで、レスリーがアンテナになれば、軍も知っただろう。そうなれば、戻ってこいという話しが出てもおかしくないのはわかっていた。

「レスリーを危険な目にあわせたくない」

「任務が全部危険ってわけじゃないだろ。軍だって、伯爵令嬢を危険な任務になんて行かせないさ。実は、親父さまからの伝言もある」

「.....なんて？」

「レスリーが引き受けた任務のみ協力するというのはどうだ。って」

（ジュリアス？ どこに居るの？）

ぱっと、ジュリアスは顔を上げる。ちょっと失礼とドミニクに断って、すぐさま二階の寝室に駆け上がった。

「レスリー、大丈夫？」

ベッドの上に起き上がっていたレスリーは、ジュリアスの姿を認めて、にっこりほほ笑んだ。

寝乱れてくしゃくしゃになった黒髪は絹糸みたいに繊細で艶やか。その黒髪がこぼれる肩や胸は真っ白で、胸元に引き寄せたシャツで隠しきれないところに、いくつもジュリアスのつけた赤い所有印がちらばっていた。まだとろんとしている青い瞳に誘われるように、ジュリアスはベッドに膝をつく、今日だけでもう何度キスしたかわからない唇に吸いついた。キスを深めると、レスリーは体の力を抜いて、ジュリアスにくったりともたれてくる。その重みと体温が愛しくてたまらなかった。

「今、何時？」

「もうすぐ夜九時」

「九時.....」

「お腹減っただろ？ 今、下にドミニクが来てて、一緒に食事してる。レスリーもおいでよ」

「あ、でも」

「今日はここに泊っていつて。帰したくないんだ」

ぎゅっと抱きしめて、額に唇を押し当てる。それだけで、レスリーが折れてくれたのを感じた。

「母にメールしとかなきゃ。心配するかも」

「わかった」

寝室のテーブルの上にある、レスリーのバッグをとってくる。携帯を取り出したレスリーがメールを打つのを、大人しく見守った。

「.....何かあった？」

「え？」

携帯から顔をあげたレスリーが小首をかしげてジュリアスを見る。とても可愛らしい仕草だった。

「なんだか、考えこんでる。迷ってる？」

「.....そんなことまで感じるんだ」

「ドミニクに何か言われたの？」

ジュリアスはもう一度レスリーをぎゅうっと抱きしめる。

「ジュリアス？」

「君の意見も聞きたいんだ。ドニも一緒に食事しながら話さない？」

「うん」

レスリーの手が伸びてきて、頬を包んだ。俯かされたと思うと、レスリーの唇がちゅっと音を立てて触れた。

「私を仲間外れにしないあなたって、大好きなの。もう話してた？」

「初めて聞いた」

「何度も言って、もう置いていかれないようにしなくちゃ」

笑いながら、レスリーは何度も軽いキスをくれた。

レイノックスの任務で、最後の最後にレスリーは留守番で、ジュリアスはドミニクと任務完了させてしまったのが、とてもショックだったのだと、レスリーは話してくれた。なので、アンテナになれたというのは、レスリーの中で嬉しいことに分類されているらしい。

（レスリーはやりたいて言うかもな）

ジュリアスとしては、ちょっとでも危険なことにレスリーを近づけたくない。だから軍の任務なんて、無関係でいたいと思うけれど、レスリーは違うかもしれない。むしろ、ジュリアスと一緒にの仕事だと、喜びそうな気がする。

それに、レスリーは本当にとっても有能な女性だ。ドミニクによると、射撃の腕も確からしいし、あの場面でパニックにならなかったなんて、肝も座っていると絶賛していた。今の事務仕事には物足りなさを感じているようだし、レスリーにはもっとハイレベルな同僚が必要だろう。そう思うと。

ふと、視線を感じて顔を上げる。するとすぐに、レスリーと目があった。

「………」

レスリーは何も言わない。だが、とろんとしていた目が、キラキラと輝き、口角がきゅうっと上がっている。彼女の表情を言葉にするならば、それ楽しそう！ だろうか。

「レスリー」

「シャワー浴びてから、下に行くわね。何か着るもの貸してもらえる？」

「……わかった、探しとく」

「急いでね！」

レスリーはジュリアスの頬をぎゅうっと押すと、あっちを向かせて、自分はそのまま裸でバスルームへ駆け込んだようだった。いや、途中で下着を拾って入ったらしい。ベッドの下に落ちていた可愛らしいショーツが無くなっていた。

以前、ドミニクに言われたことを思い出していた。今までジュリアスが付き合ってきた女性といえば、年下で可愛らしくて甘えてくれるタイプばかりだった。だが、いつも長続きしなくて、すぐに別れてしまっていた。それは、自分の特異な能力のせいだろうと思っていたけれど、もしかしたらそうじゃなくて、レスリーみたいなしっかり者な女性の方が本当の好みだったのかもしれない。甘やかすのも好きだし、好きな女性は守りたいと思うけれど、時には甘えたり引っ張ってもらうのも、すごく心地よかった。ドミニクに言ったら、また、三男坊め！ とか言われそうだが。

「ジュリアスー。服は一？」

「今持ってくよ」

ジュリアスは笑いながら、自分のクローゼットをあさりに立ちあがった。

一カ月後。

レスリーはかなり緊張しながら、一大隊長のオフィスをノックしていた。

「入れ」

一大隊長といえば、近衛軍におけるナンバーツーとも言える実力者だ。次の司令官には、大体、一大隊長が任命される。今の司令官だって、司令官になる前は、一大隊長だった。

レスリーが一か月前まで働いていたのは、一大隊の下の中隊だった。そこから一中隊はスルーして、いきなり的一大隊である。緊張しないほうが嘘だ。

「今日付けで一大隊所属になりました。よろしくお願いいたします」

「おう、よろしく」

と、鷹揚に挨拶したのは、一大隊長のヘルマン。年齢は司令官と同じぐらい、身長と体重は上で間違いないだろう。

ジュリアスもドミニクも、彼を『喰えないオヤジ』だと言っていた。

「大隊直属は忙しいぞ。気合入れてやってくれ」

「はい！」

「直属の軍人たちとの連絡、調整、ケア、苦情受付、なんでもやってもらう。慣れたら、仕事割り振りと作戦立案まできてもらう。いいな」

「はい」

オフィスには、すぐにレスリーの先輩にあたる人が呼ばれ、詳しいレクチャーは彼から受けることになった。

ひょろりと背が高く、真ん丸の眼鏡がよく似合う、ぱっと見は大学生のようだった。

「ベイリーだよ。こう見えても、三十二歳。専門は情報工学。よろしくね」

「よろしくお願いします」

「ところでさ」

「？」

「ジュリアス・マナーズと付き合ってるって本当？」

ばこんと派手な音がして、ベイリーが前につんのめった。大きなファイルを持った男性が、ベイリーの後でにこにこ立っていた。

「セクハラだセクハラ！ やあ、レスリー。君の直属の上司になるモーガンだ。ベイリーは優秀だけど、ちょっと常識に欠けていてね。今みたいな質問されたら、即座に蹴り倒していいからね」

「よろしくお願いします」

笑顔のモーガンと握手しながら、ジュリアスのモーガン評を思い出す。彼曰く、『モーガンは歩く人間コンピューター。作戦室で一番信頼できる人』。司令官からの信頼も厚いそうだ。

「忙しい部署だけど、やりがいがあるよ。最初は大変だと思うけど、頑張って」

初日、モーガンと話せたのはそれだけだった。すさまじく忙しい人で、彼を見かけるたびに違う仕事をしているように見えた。

レスリーはベイリーが持ってくる資料を読み、理解するところから始めた。その間に、入れ替わり立ち替わり、多くの人が現れてレスリーによろしくねと話しかけてくる。この一大隊作戦室に所属している軍人も事務官も多く、誰もが一所にじっとしていなかった。

落ち着いて資料に取り組めるようになったのは、人が減ってきて、レスリーと初対面の人が居なくなった、夜八時過ぎ。レスリーは持ち前の集中力を発揮して、資料の山をどんどん減らしでいった。

ぴとっと、頬に指が触れ、レスリーは驚いて顔をあげた。

「ジュリアス」

目の前に、かなりすねていますという表情のジュリアスが立っていた。彼も仕事の帰りなのだろう、朝行く時と同じスーツ姿だった。

「どうやってここに」

入ってきたのかと言いかけて、間抜けな質問だったと口を閉ざす。代わりに、別のことを聞いた。

「勝手に入っていいの？」

「いいんじゃない？ 一応、俺もパートタイムで仕事する契約になってるしね。それに、ここのシステムは俺のお友達なんだよ。だから、フリーパス」

「ベイリーに、何度もあなたのこと聞かれたわ。いつかあなたにも破られないシステムを作るのが夢だって」

「夢を持つのはいいことさ。ところで、もう帰るよ」

と、腕時計を指でさされる。見れば、もう十時前だった。時間を認識した途端、お腹が減ってきた。

「初日から飛ばし過ぎだよ。こんなペースじゃ、三日でぶっ倒れる」

「そんなにヤワじゃありません」

「駄目駄目。モーガンにこのペースで働けると思われたら、物凄い量の仕事をまわされるのが見える。仕事をするのもいいけど、俺との時間を確保してくれないと」

「.....してくれないと？」

「ここのシステム、丸一日ダウンさせてやる」

「ひどい脅し」

くすくす笑うレスリーの腕を、ジュリアスは優しく引っ張る。椅子から立たせて、腕の中に抱きしめた。

「十五時間も君に会えないなんて、悲しすぎる」

「お腹が減ったの、ジュリアス。何か食べて帰らない？」

「君は俺より喰い物なんだ！」

「そうじゃないけどね」

レスリーは笑いながら片づけをする。大きなファイルを棚に戻すのを、ジュリアスも手伝ってくれた。

戸締りを確認して、オフィスの明かりを落とす。一大隊直属のオフィスは中隊のオフィスより上階にある。エレベーターにいつもより長く乗って、セキュリティーを通過して外に出た。セキュリティーは指先一本で通過したジュリアスは、早速と言わんばかりに、レスリーの手を握る。一応、オフィスビルの中では遠慮していたらしい。

「この時間じゃ、レストランは閉まってるよ。冷凍ピザで手を打たないか？」

「サラダもあるよね？」

「野菜はまだ残ってた」

「なら、手を打とうかな」

ジュリアスのお願いと、一人暮らしを心配するレスリーの両親の希望もあって、レスリーはジュリアスの家で同居を始めていた。

仕事を再開するまでの一カ月、レスリーはジュリアスの安全な家の中、どこよりも安心できる彼の腕の中で、ゆっくりと心と体を休ませることが出来た。ジュリアスの両親と兄弟たちに紹介され、歓迎された。彼の兄弟たちは誰もが個性的で刺激的で、そして誰もがジュリアスの恋人であるレスリーを愛してくれた。愛と信頼の絆で結ばれている輪の中に入れてもらえて、レスリーはとても嬉しかったし、彼等の中では素の自分を出せることに気がついた。誰もレスリーのことを、クールビューティーだなんて言わなかったし、思っていなかった。

「レスリー、夜十時までの仕事は長すぎる。もっと早く帰らないと駄目だよ」

車の運転をしながら、ジュリアスがすねていない真剣な顔でそう言った。本気でオーバーワークを心配してくれているのだ。

「うん、ごめんね。つい夢中になっちゃって。もっと早く帰るようにする」

「明日は、俺と食事に行くこと。七時に外で待ってるから」

「えー」

つい不満げな声をあげてしまったら、横目でジュリアスに睨まれてしまった。

「七時。絶対だ」

不満は時間だと思ったらしいジュリアスは、そう念を押してきた。だけど。

(違うんだなあ)

(何が)

(ジュリアスが外で待っていると、目立つの。女の子たちがきゃーきゃー言って、翌日、質問攻めにあうのは私なんですけど)

小さくジュリアスが吹き出した。冗談だとでも思っているのかもしれない。

「なら、車で待ってる。それでいいだろ？」

「うん」

車が赤信号で停まると、ジュリアスは当たり前という顔で、レスリーの肩に手を伸ばしてきた

。ぎゅっと引き寄せられ、強引にキスをされる。ちゅっと舌を軽く吸われ、唇は離れて行った。
短いけれど、濃厚なキスだった。

ジュリアスのキスは誰のキスとも違う。触れ合うのは唇だけでも、舌だけでもない。愛しているという心ごと、触れ合う。だから、心も体も満たされる。

（すごく幸せ）

（俺も。君に出会えたことは、一生に一度の幸運だったと思うよ）

目の端に、信号が青に変わったのが見えたけれど、レスリーは目を閉ざしてジュリアスのキスが落ちてくるのを待った。

END

◆よかったらHACKの感想などお聞かせください。以下のページで受付けています。

[HACKのちょこっと感想&アンケート](#)